
キリシタン時代の宣教師から見た日本の音楽

——フロイス『日本史』の記述から探る

山上千乃 愛知県立芸術大学大学院音楽研究科博士前期課程(音楽学)

1. はじめに

本稿の目的は、イエズス会の宣教師ルイス・フロイス Luis Fróis (1532-1597) が著した『日本史 *Historia de Japam*』(以下「フロイス『日本史』」)に描写されたキリシタン時代における日本の音楽実践の様子、とりわけ宣教師から見たキリシタン時代の日本の音楽について、宣教師の日本の音楽に対する感じ方、考え方について明らかにすることである。なお、一般にキリシタン時代とは、キリスト教伝来(1549年)から徳川幕府による禁教令(17世紀初頭)までのことを指す。しかしながらフロイス『日本史』は1549年から1593年までのことを記述しているので、本研究ではその年代を扱い、分析対象とするテキストは『完訳フロイス日本史』(フロイス2000)¹である。

キリシタン時代に、どのような音楽が鳴り響いていたのだろうか。キリシタン時代の音楽は「キリシタン音楽」と呼ばれ、盛んに研究が行われてきた。イエズス会と音楽の研究では、イエズス会の視点から宣教と音楽の関係について言及されているものもある(深堀2016)が、本研究の分析対象とするフロイス『日本史』について深く扱われていない。

フロイス『日本史』を取り扱う先行研究は、宗教や祭礼、建築や庭園、女性の地位や役割という観点から読み解くもの、『日本史』の史料的価値を考察するもの、複数の版が存在する写本について精査するものなど多岐にわたっているものの、音楽についての先行研究は見あたらない。フロイス『日本史』の史料的価値については、1563年までのフロイス来日以前の記録は二次的史料という側面があるため、あまり注目されてこなかった。だが、フロイス『日本史』にしか見ることができず、かつ脚色の動機が見られない記述もあり、重要な史料であると言える(岡本2019:202-201)。

フロイス自身による日本の音楽の捉え方を読み取ることができる書籍として、1585年に著した『日欧文化比較 *Tratado em que se contem muito susintae*

abreviadamente algumas contradições e diferenças de costumes entre a gente de Europa e esta provincial de Japão』²（フロイス 1991）がある。しかしながら『日欧文化比較』では、音楽の構造や歌い方、楽器などについての日本と西洋の比較が記述されており、具体的な音楽やその実践については取り上げられていない（小野 2005）。その点においてフロイス『日本史』の記述は、宣教師の目線によるものであるため、キリシタン時代の日本の音楽の実際の様子を知ることができる。

こうしたことを鑑みて、本研究ではフロイス『日本史』に見られる音楽に関わる記述に着目したい。本稿の先駆けとなった筆者による研究（山上 2022）では、フロイス『日本史』に記された音楽に関わる記述全てについて精査したところ、①琵琶法師や念仏、祭りなどの日本の音楽に関する記述、②日本人によるミサや音楽劇、西洋音楽などに関する記述³、③その他、外国人による音楽の記述の3種類に分類することができた。

本稿では①の日本の音楽に関する記述を考察することを通して、宣教師から見たキリシタン時代の日本の音楽について、宣教師の日本の音楽に対する感じ方、考え方について明らかにする。なお、フロイス『日本史』に記された音楽に関わる記述の全体は、資料として本稿の最後に提示したい。これらの記述について分析する先行研究は見あたらず、資料として明示することにも一次資料の整備という観点から意義があると考えられる。さらに、キリシタン時代の日本の音楽の実践例を挙げた記述や宣教師という外国人の目線で書かれた記述を読み解くことは、イエズス会研究やキリシタン音楽研究にとって重要な側面になると言えよう。

以下、第2節ではフロイス『日本史』の概要を述べ、第3節では宣教師から見た日本の音楽について実際の記述をもとに考察していく。最後に資料「フロイス『日本史』に見られる音楽の記述」を示す。なお、資料の通し番号17までは本稿の本文中で扱っており、各番号は資料と本文とで対応している。通し番号18以降は『完訳フロイス日本史』での掲載順に示している。

2. フロイス『日本史』の概要

まず、日本でのフロイスの活動について概観すると、フロイスは、1563年

7月に長崎の横瀬浦に上陸した。この時機のイエズス会は、九州、山口、畿内へと日本宣教を進めている最中であった。なお、イエズス会は1549年8月にフランシスコ・ザビエル Francisco Xavier (1506-1552)、コスメ・デ・トルレス Cosme de Torres (ca.1510-1570)、フアン・フェルナンデス Juan Fernández (1526-1567)らの鹿児島への上陸により、日本での宣教活動を始めた。フロイスは1548年にイエズス会に入会するまでは、生まれ故郷のポルトガルのリスボンで王室付き書記官として、王室秘書庁 *Secretario Real* で働いていた。入会後の日本では、庶民や大名の改宗、仏僧との教義に関する論争などの宣教活動の傍ら、書簡の写しの作成や書記、通訳などの仕事をした。彼の日本宣教における大きな成果の一つとして、多くの書物を著したことが挙げられる。本稿で考察の対象とするフロイス『日本史』はもちろんのこと、『日欧文化比較』、『二十六聖人の殉教の記録』⁴、その他イエズス会の報告書などがある。フロイスは、他のイエズス会士から文筆家としても高く評価されており（五野井 2020：42-44）、彼は宣教師と文筆家という2つの面から日本宣教を支えていたと言える。

次に、フロイス『日本史』が書かれた経緯について確認したい。1583年、フロイスは日本準管区長であるガスパール・コエリョ Gaspar Coelho (ca.1530-1590) から日本宣教史を書くように命じられる。彼は文筆家としての仕事が認められ、フロイス『日本史』の執筆に至るのである。その後宣教活動の第一線から退き、11年後の1594年に全3巻に及ぶ『日本史』を上梓した。

続いて、フロイス『日本史』の史料の状況についてまとめる。なお、表1はフロイス『日本史』の原本の構成と写本の状態についてまとめたものである。第1巻は序文、日本六十六国誌、日本総論からなる。序文と日本六十六国誌については未発見の状態で、日本総論については目次のみで写本が発見されている。第1巻は1584年に書き上げられた。第2巻は本文に入り、その第1部は1549年から1578年の記録で1586年に概ね書き上げられた。第3巻は本文の第2部1578年から1589年の記録および、第3部1590年から1593年の記録からなる。フロイスは1592年までは日本で執筆を続け、その後マカオへ発ち、同地で1594年に『日本史』を世に問うた。

無事にフロイスは『日本史』を書き上げたものの、内容が膨大すぎることからポルトガルに送ることを許可されなかった。そのためフロイス『日本史』は、

彼の死後も日本に保管されていたが、日本のキリシタン弾圧が加速したことから、東アジア宣教の中心地であったマカオ司教座聖堂に移された。1742年にはポルトガル人司祭が、フロイス『日本史』の写本を作成し、マカオからポルトガルに送付した。しかし1759年にポルトガルからイエズス会に追放令⁵が出され、財産や図書館が没収されてしまい、フロイス『日本史』の存在も忘れ去られた。1835年には、原本が保管されていたマカオ司教座聖堂が焼失し、原本が失われてしまった。その後、1895年に第1部の写本がポルトガルのアジュダ図書館 Biblioteca da Ajuda で、1931年には第3部の写本が、南フランスのキリシタン資料蒐集家であるポール・サルダ Paul Sarda（生没年不詳）のコレクションから発見された。翌年、第2部の写本がポルトガルの海外領土史文書館 Arquivo Diplomático e Biblioteca にて発見された。

表1 フロイス『日本史』の構成と写本の状態

巻数	内容	記述の過程	写本の状態
1	序文	1584年に書き上げる	未発見
	日本六十六国誌		未発見
	日本総論		目次のみ発見
2	第1部（1549-1578年の記録）	1586年に概ね書き上げる	1895年発見
	第2部（1578-1589年の記録）	1592年まで日本で執筆し、マカオで1594年に書き上げる	1932年発見
3	第3部（1590-1593年の記録）		1931年発見

3. 宣教師から見た日本の音楽

本節では、フロイス『日本史』における日本の音楽に関する記述について、内容を精査していく。それぞれの引用文の最後の番号は、資料「フロイス『日本史』に見られる音楽の記述」の通し番号と一致している。引用文の詳細については資料を参照されたい。なお、引用文中における記号として、[...] は中略、（）は筆者の補足、【】は訳者の補足を意味している。

まずは、宣教師が見聞きした日本の祭りやその音楽について取り上げる。

[...] 都（京都）の市内では、古来、神や仏に対する畏敬から盛大な祭りが行なわれた。[...] 第六月の十五日には、祇園と称せられる偶像を敬う

祭りが催される […]。 […] 行列では、まず上部にはなほだ高い舞台が設けられた十五台、またはそれ以上の車が行く。 […] その車は二階、または三階で、その各階には高価な絹衣をまとった、都の市民の子どもたちである大勢の少年がいる。彼らは楽器を携えており、そうした装いで演技をしたり大声で歌ったりする。(資料-1)

これは京都の祇園祭についての記述であると思われる。この記述では祭りの行列がどのように進むのかという事実しか書かれておらず、宣教師の感想などは見られなかった。

ここに記述されている、車に乗る少年たちが演奏している楽器とは具体的にはどの楽器を指しているのであろうか。中世の祇園祭の様子が描かれている、狩野永徳(1543-1590)の作とされる「洛中洛外図屏風(上杉本)」⁶(米沢市立上杉博物館所蔵)を引き合いに出したい。なお、「洛中洛外図屏風(上杉本)」の景観年代は天文法華の乱の起きた1536年以降とされ(河内2015:15)、この記述がなされた1562年と近いことからこの作品を選んだ。屏風の右隻を見ると、祇園祭のほこ鉾が行く様子が描かれている。巡行の先頭を行くなぎなたほこ長刀鉾には、「お稚児さん」と呼ばれる子どもたちが乗っている。彼らは、鼓の一種である鞆鼓や笛を演奏している。このことから宣教師が見た楽器も、鞆鼓や笛だと考えられる。

次に、大阪の住吉大社の例大祭と思われる記述を示したい。

堺では七月二十九日に、住吉大明神という神を祀る別の祭りがある。 […] 準備が済むと、半里離れたかの住吉の社から、両手に刀を携えた偶像が騎乗して来る。その後から、弓と、矢を入れたえびら籠を携える小姓が続き、その後方を手に鷹を持った別の者が続く。彼らの後から、徒歩や騎馬で偶像の伴をする大勢の人たちがやって来る。これらの人たちは皆、武器や武具を携え、「千歳楽、万歳楽」、すなわち千年の喜び、幾千万年の楽しみという意味の言葉を唱えながら歌い、かつ踊る。彼らがかくも喜びしてこれを唱えるのは驚くべきことである。多数の馬が進む […]。 […] 馬が通過すると、神主と称する白衣の多数の僧が、はなはだ大きい広い

袖の衣をまとい、紙か革でできた非常に美しい黒の僧帽を頭にかぶってやって来る。この後に女妖術師【巫子】たちが馬で進むが、彼女たちは同様に白衣をまとい、非常に美しく飾り、おびただしい数の婦人たちに付き添われ、歌いながら行く。(資料-2)

宣教師は、人々が喜びして「千歳楽、万歳楽」と歌うことに驚きを示していた。祭りについて詳細に記述されていることから、宣教師が日本の祭りについて強く興味を持っていたことがわかる。

以下に、奈良の春日大社の巫女についての記述を見てみよう。

(ルイス・デ・アルメイダ修道士の報告。春日大社において)[...]彼女(巫子)たちは、社人と呼ばれる一種の僧侶と結婚しています。両者ともこの神社に仕えています。[...] 何びとかが、健康、財産、安産、勝利、もしくは紛失物の再取得といったことを願うならば、この巫子のところに赴いて、自分のために神楽を催してもらいます。すると数名の社人が、太鼓その他の楽器を携えて現われ、巫子たちも同じように他の楽器を携えて現われ、そのうちの一人が縦長に切った紙片を結び付けた棒を手にして、神像の前で踊ります。彼女はそれを、鋭く速い音楽の伴奏によって、いとも激しく行ないますので、私たちの耳にはまるで地獄の叫喚と咆哮もかくやと思われるほどなのですが、ついに彼女は失神したように地上に倒れてしまいます。人々は、その時に神の霊が彼女に移るのだと言っています。ついで彼女は立ち上がり、人々が頼みに来たことについて答えます。これに対して彼らは彼女らに千二百カシャを支払います [...]。それから彼女たちは、この喜捨を自分たちの間、および一人が踊っている間に楽器を奏した僧侶たちの間で分配します。(資料-3)

この記述では、神楽の詳細な様子が書かれている。巫女の舞は、「神楽」と「舞楽」の2種類に大きく分けられる。神楽では、巫女が舞うことによって一種のトランス状態を起し、憑依儀礼を行っていた。つまり巫女は舞で神霊を招き、神懸かりして託宣を下ろしていたのである。しかし明治期の神道統制によって、

神楽は廃れてしまった。よって現存する巫女の舞は、憑依儀礼を除いた芸術的側面を高めた舞楽として残ったものである。この箇所は、現代では見ることでできない巫女の神楽について伝える記述だと言える。巫女は、鋭く速い音楽の伴奏によって激しく舞うことで神懸かりをし、人々の頼み事にこたえていた。激しい舞の音楽については「地獄の叫喚と咆哮」と記されており、宣教師は良い印象を持っていなかったように思われる。

同じ奈良でも東大寺大仏殿については、梵鐘に着目した記述が見られる。

(ルイス・デ・アルメイダの報告。) この寺院(東大寺)【大仏殿】の境内の外に、非常に堅固な木造の塔があります。[...] 中にその主たる梵鐘があります。[...] それは口径が二ブラサ、高さは三ブラサ半、厚さは約一パルモ半ありました。それは柔和な音響で、遠いところからも聞くことができます。(資料-4)

梵鐘の大きさに言及している。大きさの単位の変換については、表2にて示した。

表2 東大寺の梵鐘の大きさ

	フロイス『日本史』の表記	単位変換	メートル法表記	東大寺の公式の値
口径	2 ブラサ	1 ブラサ = 約 1.67	約 3.34 メートル	2.71 メートル
高さ	3 ブラサ半	メートル	約 5.85 メートル	3.86 メートル
厚さ	約 1 パルモ半	1 パルモ = 約 7.62 センチメートル	約 11.43 センチメートル	記述なし

高さについては、フロイス『日本史』と東大寺の公式ウェブサイトに掲載されている値とで約2mの差がみられた。鐘は大仏開眼供養が行われた、752年に鑄造されたものと言われている。現在までに3度(1070年、1096年、1239年)鐘が落下したが、すぐに修理されているという旨が修理銘に記されている。歴史的にはフロイスが見た鐘と現在の鐘は同一のものと考えられるが、記述上では大きさに差が見られる。鐘の音は「柔和」と表現しており、仏教は彼らにとって敵対勢力であるが鐘の音に関しては良い印象をもっているようであった。

次に、当時の武家の子弟教育の様子が垣間見られる記述を取り上げる。

豊後の国には、田原親賢という一人の国衆がいた。 […] 彼は後継ぎの息子がなかったので、都に赴き、そこで九歳か十歳くらいと思われる柳原殿という公家の息子である一少年を養子にした。 […] 彼はすでに立派な素質の持ち主であったので、親賢のお陰で、親賢が彼に学ぶようと命じたことすべてにおいて、短期間に顕著に上達し、一同が驚嘆するうち、同じ年配の他の貴人たちを凌駕してしまい、書道とか難しい書物を理解することにおいて、また彼ら日本人の種々の楽器の演奏において、さらに乗馬、剣術、弓術、銃術、礼法、儀式、政庁のもろもろの仕来り、その他あらゆることを大いに学習し精通するに至った […]。(資料 -5)

国衆とは、大名の家来でその土地、領土を治めている者のことをいう。田原親賢(かた) (生年不詳 -1600) はキリシタン大名である大友宗麟(そうりん) (1530-1587) の家臣で、キリスト教を嫌悪していたが、家臣の中で所領は随一であった。親賢が養子にした公家の息子は親虎(ちかとら) (1560- 没年不詳) という。ここでは土地を治める者、武士として必要な教養について書かれている。親虎は公家出身ということもあるのか、優れた才能をもち、かつ努力をしていた。しかしながら彼は、1577年にキリスト教の洗礼を受けたために親賢から廃嫡されており、その後の行方はわかっていない。

続いて、大名が聴いた音楽の記述を示す。

司祭(フロイス) が都(京都) に到着して三日を経、和田(これまさ) 殿は司祭が信長の許へ伺候する準備を整えた。 […] 信長は邸の奥に入っていて、音楽を聞いていた。(資料 -6)

1569年に、フロイスが織田信長(1534-1582) に初めて対面する際の記述である。信長がどのような音楽を聴いていたのかという記述は見あたらない。この対面によって、将軍・足利義昭(1537-1597) への謁見が実現された。1565年6月の将軍・足利義輝(1536-1565) 暗殺以後、イエズス会は京都から追放されていたが、フロイスは義昭との謁見により再び京都での宣教の許可を得ることが

できた。

次に、当時の日本のキリシタンの結婚に関わる一連の記述を見てみよう。

[...] ドン・バルトロメオ（大村純忠）とその奥方は婚姻の秘蹟を受けた。ついで盛大な祝宴が催され、それに輪舞、舞踊、奏楽、その他彼らの間で慣行となっている祝い事が伴った。（資料-7）

これは、大村純忠（^{すみただ}1533-1587）と妻おゑん（生没年不詳）の「婚姻の秘蹟」に関する記述である。婚姻の秘蹟はカトリックの結婚のミサのことであるが、その後の祝宴は日本式のものが行われていたのだとわかる。彼はおゑんと婚姻の秘蹟を受け、複数人いた側室と離縁し、その後は一夫一妻を守った。

続いて、天皇の行幸の際の音楽に関する記述を検討したい。

（五月十四日に秀吉が行なった、後陽成天皇の行幸での聚楽第から内裏へのお迎えにおいて）先頭には、濃紅色のダマスコ【織の衣装】を着た七十名の騎馬の人たちが進んだ。[...] 第七番目には、全部黒漆塗りの車輪がついた凱旋車が続いた。[...] その輿の中には、あたかも偶像のように高慢極まりない暴君【秀吉】が鎮座していた。さらに約百名の公家が従っていた。内裏（後陽成天皇）を関白の城に迎えるために、一行がこうした盛儀と華麗さを装って目的地の内裏の宮殿に着いた後、上記と同じように人員が配列し、同じ形式で帰還したが、さらに次の人々が加わった。第二番目には [...] 年配の公家が行進した。ついで立派なダマスコ織を装い、地面を引き摺る長い衣装をまとった公家の一団が徒歩で進んだ。彼らは宮廷の楽団員で、あるものは笛を、他のものはヴィオラ【のような楽器】を、また他のものは内裏の宮殿で用いる種々の楽器を奏でていた。それらは日本人には響き良く快くとも、ヨーロッパの音楽と比べると、耳障りで不快なものである。（資料-8）

この記述は、後陽成天皇（在位 1586-1611）を内裏に迎えに行き、豊臣秀吉（1537-1598）の政庁兼邸宅であった聚楽第へ帰るときに天皇の楽師も伴って行

進したということを示したものである。楽師は、徒歩で楽器を演奏しながら進んだ。2008年に新たに見つかった「御所参内・聚楽第行幸図屏風」（上越市立歴史博物館所蔵）を見ると、右隻に長い衣装をまとった楽器を持った人々が描かれている（狩野 2010：4,5）。彼らは琵琶や笙、^{ひちりき}箏、鞆鼓、鉦鼓などの、雅楽の楽器を手をしている。引用した記述に、「ヴィオラ」とあるのは琵琶のことを指す。イエズス会によって作成された『日葡辞書 *Vocabulario da Lingoa de Japam*』においても、琵琶をヴィオラと説明している。

聚楽第で催された一連の出来事について、以下のような記述がある。

内裏（後陽成天皇）は暴君【秀吉】の御殿と城【聚楽第】に五日間滞在した。その間盛大な祝典や数々の娯楽が催され、連日、素晴らしい饗宴と奏楽が行なわれた。（資料 -9）

後陽成天皇が聚楽第に滞在している間、盛大なもてなしがなされていた。この大きな饗宴を経て、秀吉は天皇にも諸大名にも自分の権威を見せつけることに成功し、天下人への歩みを進めたのである。

ここまで見てきたように、宣教師は活動を行う中で様々な日本の音楽にふれてきたことがわかった。音楽については、良い印象をもっていないものが多かった。確かに日本音楽と西洋音楽では、音程や協和音・不協和音の感じ方、拍の取り方など違いが多くあるため、宣教師にとって日本の音楽は受け入れにくかったと考えられる。

こうしたなかで、仏教徒が街中で念仏を唱えていたという記述が見られる。

[...]（京都の）幾人もの人々は、この「南無阿弥陀仏」の呼称を、街頭でも、家の中でも、売買の際にも、つねに種々の旋律でもって繰り返すほど、熱心に行なうのである。そして多くの男女 [...] は信心の業として、死んだり、力尽き果ててしまうまで、真夜中を少し過ぎた頃に家の中で起き出でて、小さな鉢 — 特にこの祈りのために作られたもの — を持ち、一本の棒で叩く。そして彼らはその音に和して、夜の残りを天明に至るまで、隣近所全体に聞こえるほど大声で阿弥陀の名を歌いながら呼び続

けるのである。(資料 -10)

ここでは、仏教の念仏が音楽として捉えられている。フロイス『日本史』において、キリシタンも教会の外の街中で、教理の歌や聖歌を歌っているという記述が見られる(資料 -21、43、49、57 参照)。フロイスは、仏教徒もキリシタンと同じようなことをしていると見ていたことがわかる。それだけ当時の人々にとって、宗教が身近にあったのだと考えられる。念仏に対して宣教師はどのようなイメージを抱いていたのだろうか。

日本には、その年の七月に盆と呼ばれる祭りを行なう習わしがある。それに先立つ十日あまり前に、数名の俗人で身分の低い阿弥陀の信徒らは、人々の信心を高めるために、夜の十時から夜半過ぎの二時か三時まで、仏の名を唱えながら、鉢をゆっくり叩いて街路を歩く。響の良い音楽のようなその声を聞くと、同宗のものは戸口に出、仏僧たちに届けてもらうよう彼らに喜捨を行なう。彼らはこの業を、一晚ないし二晩行うが、嫡子(大友義統)は、夜間に阿弥陀のことを唱って歩く者があれば、見つけ次第殺してしまうようにと布告させたので、それ以来二度と唱う者はいなくなった。(資料 -11)

この記述では、念仏を「響きの良い音楽のようなその声」と表現しており、念仏に対して良いイメージを持っているように感じられる。ただその後には、大友宗麟の嫡子である大友義統(1558-1605)による仏教の排斥が行われている。義統は秀吉の九州平定後の1587年にキリシタンになっているが、まもなく出された伴天連追放令⁷のために棄教している。この記述は1578年のものなので、彼はこの時はまだキリシタンではなかった。

このようなキリシタンと仏教徒の宗教間の対立があったことがわかる記述を、以下に示す。

都(京都)のキリシタンたちは、二、三里も離れたところまで司祭を出迎えに行った。[...] 降誕祭の夜を彼らはその習慣に従い、大いに荘厳に、

そして聖歌を歌って祝賀した。だが我らの主なるデウスが、この国で讚美されるのを堪え難く思った異教徒たちは、夜通し教会に投石した。(資料 -12)

宣教活動に多くの困難を伴った京都では、夜通し「異教徒」であるところの仏教徒から教会に石を投げ込まれていた。この他にも特に京都において、仏教徒から一方的に攻撃されるというような記述が多く見られた。

(府内近くの津守で十字架を建てる際に) […] 府内の市で仏僧や異教徒たちをあっと言わせようと、松の木を伐り出した場所から真直ぐの道を通ればもっと近かったのに、一同は協議の上、府内では年に一度の祇園祭りという異教徒たちの盛大な行列の時だけに用いられる車の上に、その松材を乗せて運搬することにし、[…] 何人かは、額に入った聖画を携え、横笛、その他、奏楽や祝祭に用いる楽器を持って材木の上に乗っていくことに決めた。(資料 -13)

一方、豊後府内では、地元の祭りで使われる山車を勝手に使って材木を運ぶというキリシタンの仏教徒への嫌がらせが行われていた。府内は、キリシタン大名・大友氏の本拠地ということもあり、キリシタンの勢いが強かったと考えられる。

このように、確かに宗教間の対立はあった。しかし敵対勢力である仏教の琵琶法師がキリシタンになり、宣教活動に影響を与えていたという事実もある。具体的な人物や与えた影響について、以下に示す。

山口には、片眼が全然見えず、他の眼はごくわずかしか見えない一人の盲人がいた。彼は日本での一般の習慣どおり、琵琶で生計を立て、貴人たちの邸で奏でたり歌ったり、諧謔や機知を披露し、昔物語を朗吟したりしていた。というのは、彼は、この点、盲人たちが絶えず従事している按摩以外に、その澁刺とした才気や大いなる識見、また理解力と恵まれた記憶力によって、他の多くの盲人たちに擢んでおり、好まれたの

である。彼は、異国人たちがその市（山口）で新しい宗教を説いていることを耳にしたので、司祭を訪れる決心をし、事実訪問した。[…] メストレ・フランシスコ（・ザビエル）師は、十分教えこんだ後に彼に洗礼を授け、ロレンソの名を与えた。[…] 彼は、物語をし、琵琶を弾き、朗吟したりして人々を楽しませる仕事で生計を立てていたのを断念し、自分の性質に応じてできそうな任務で我らの主なるデウスに奉仕するために、教会の一員になることを決意した。[…] 彼は今日までにイエズス会が日本で有した最も重要な説教師の一人となった。（資料-14）

これは、ロレンソ了齋（1526-1592）という日本人イエズス会士についての記述である。彼は長崎の平戸で生まれ、生まれつき目が不自由であったため琵琶法師として生計を立てていた。1551年25歳のときにザビエルに洗礼を受け、キリシタンになった。さらに1563年にイエズス会に入会し、修道士となった。ここでは、ロレンソが日本宣教において最も重要なイエズス会士の一人であったことがわかる。

以下に、宣教において目の見えない人々がどのような活動をしていたのかについての記述を見てみたい。

五畿内の諸侯の間には、一人の若い盲人を家に置いて奉仕させる習慣があった。それには二つの目的があり、一つは自分たちの遊樂のためで、彼らが歌ったり奏でたり、日本の古い歴史を吟ずるのを聞くを常とした。第二には外部に伝言を遣わすためであった。けだし彼らはふつう思慮深く、物事の交渉に巧みだからである。我らの教会においても、こうした盲人の若者を幾人か、彼らがキリシタンになった後に使っていた。だが目的は異なり、彼らをして、田舎を廻って新たな改宗者にキリシタンの教義を教えたり、異教徒に説いたり、キリシタンたちに聖人伝やデウスのことを話させるためであった。（資料-15）

この記述だけでは、「盲人」が琵琶法師であったかどうかは断定できない。しかしながら、先ほど挙げたロレンソ以外にも何人かの盲人がキリシタンになり、

宣教活動を行っていたことがわかる。彼らは得意の話術を生かして、宣教活動に大きな影響を与えていた。

続けて、琵琶法師の活躍について2つの記述を検討したい。

彼（盲人トビアス）はこの巡礼行を都に隣接した近江の国から始め、目的地の重立った貴人たちの邸に着くと […] 彼はまず背にしていた琵琶を奏で、いくつかの古い歌を吟じ、得意とする含蓄ある二、三の冗談でもって相手の気持ちを把握し、憐憫の情を獲得したと見なすやいなや、おもむろにデウスのお話を持ち出した。そこで彼らはその話題の新奇さと、愛情をこめた話ぶりに少なからず驚かされた。彼はその説話でもって人々を満足させると、もはや彼の許に長くは留まろうとはしないで […]。 […] トビアスはデウスのことを要点だけ語ったのだがそれでも彼らには強い印象を与え、少なからぬ関心と呼ぶに至った。（資料-16）

高德で優秀なキリシタンであるトビアスと称する盲人の行為を割愛することはできない。彼は我らの聖なる教えに精通し、大いなる愛情と熱意をもって異教徒とキリシタンたちに説教していた。 […] 人々は […]、日本で盲人に与える習慣となっているある肩書を得させることを成就した。盲人たちは、この位によって高い尊敬を受けることとなり、あらゆる高位の人とも対話でき、琵琶を奏で昔の戦物語を歌って、かの諸侯を喜ばせていたのである。トビアスもこうした機会を得ることによって、この期間中、各地を巡歴し、キリシタンたちを慰め励まし、異教徒を改宗させたりして、人々の靈魂に多大の利益をもたらした。（資料-17）

これらは、トビアスというキリシタンについての記述である。彼の生没年は不詳であるが、ザビエルから洗礼を受けた1551年当時8～10歳で、子どもの頃から宣教師たちと暮らしていたとされる（ルイズ・デ・メディナ2001：174）。資料-14で挙げたロレンソと同じ年にキリシタンになっており、トビアスはロレンソから琵琶の演奏や話術などを教わったと考えられる。

このように琵琶法師や目の見えない人々がキリシタンになり、日本での宣教

活動に大きな影響を与えていたことがわかった。イエズス会が琵琶法師を使って宣教していたことから、日本宣教において、日本の音楽を戦略的に使用していたと考えられる。

4. おわりに

本稿は、フロイス『日本史』における音楽に関わる記述を通して、キリシタン時代の日本の音楽実践の様子、とりわけ宣教師から見た日本の音楽について考察した。具体的には、祭りや巫女、梵鐘などについて詳細に記録されており、宣教師の興味の幅広さが感じられた。さらに琵琶法師が宣教活動において重要な役割を果たしていたことがわかり、イエズス会の日本宣教の方針について垣間見ることができた。

その上で、本稿で考察の対象とした日本の音楽に関する記述以外に、音楽に関する記述ではどのようなものが見られるのか、そこからどのようなことが考えられるのか、とりわけ日本におけるキリスト教音楽の実践に関する記述に注目したい。宣教初期のミサでは日本人は宣教師の演奏を聴くだけであったのだが、しだいに日本人も歌ったり楽器を演奏したりするようになり、キリシタンの音楽技術が向上していったという記述が表れた。教会の外でも彼らは聖歌を歌っているという記述があり、信心深いのはもちろんのこと、それだけ人々に教会音楽が浸透していたことがわかる。これは大人たちだけにとどまることなく、子どものキリシタンたちにも当てはまることである。子どもが街中で歌うことで仏教徒への感化に繋がったり、大人のキリシタンの信仰心を深めたりしたであろう。イエズス会にとって子どもは、良い影響を与える存在であったと考えられる。さらには、大名や領主なども改宗し、教会音楽にふれ、領民たちの信仰を保護していた。大名が改宗すると多くの人を一度に改宗させることができるので、イエズス会にとって大切な存在であったと思われる。神学校 Seminario⁸では、高度な教育が行われている記述が見られた。その中には音楽もあり、立派な聖歌隊による歌やミサ仕えの演奏の存在も確認できる。その他に、天正遣欧使節⁹の日本帰国後の様子についても記述がある。彼らが神学校で音楽を教授することによって、神学生の楽器演奏の技術がさらに高まった。こうした日本の音楽以外の記述の詳細については、資料として提示した「フロ

イス『日本史』に見られる音楽の記述」を参照されたい。

本研究では、フロイス『日本史』の記録がある1549年から1593年までしか取り上げることができなかったため、その後のキリシタン弾圧の過程での音楽実践について検討することができていない。しかしながら、1587年の伴天連追放令以後も神学校での教育の精度は上がっていたという記述から、キリシタン弾圧下でも日本において西洋音楽の演奏が行われていたと考えられる。日本の音楽については、宣教師の興味の幅広さや琵琶法師の宣教活動などについて示し、当時の音楽実践の様子的一端を宣教師の目線から明らかにすることができたと考えている。

付記

本稿は、山上千乃「キリシタン時代の日本の音楽実践の様子——フロイス『日本史』の記述の考察を通して」(愛知県立芸術大学音楽学部2022年度卒業論文)を基に加筆修正したものである。

注

¹ 松田、川崎が翻訳の際に使用した写本は、2023年12月現在、大村市歴史資料館内の松田毅一南蛮文庫に所蔵されている。

² ルイス・フロイスによって1585年に執筆された、日欧の文化の違いを14章に分けて列記したもの。音楽に関しては、13章「日本の劇、喜劇、舞踊、歌および楽器について」で音色や歌い方、楽器などについて述べられている。

³ 聖祭での音楽の記述については、「歌ミサ」や「降誕祭」、「復活祭」など確実に音楽が使われたとわかるものとし、「唱える」のような音楽が使われた確証がもてないものは除外した。

⁴ 1597年2月5日、豊臣秀吉の命によって26人のカトリック信者が長崎で磔刑に処された事件。フロイスは事件発生からわずか40日で、殉教の発端となったサン・フェリペ号事件から処刑までを20章にまとめあげた。

⁵ 18世紀末、中央集権化を目指すヨーロッパ諸国との対立により各国からイエズス会の追放令が出された。1759年にポルトガルが追放を決めると、フランスやスペイン、ナポリ王国などが後に続いた。1773年には、ローマ教皇クレメンス14世Clemens XIV(在位1769-1774)によって会の解散が命令された。イエズス会の復興が許されるのは1814年のことで

ある。

⁶NHK for School のウェブサイト「ものすごい図鑑 文化財編」に掲載される画像を閲覧した。

⁷1587年に豊臣秀吉によって発せられた、キリスト教を禁止し宣教師の国外退去を命じたものの。しかしながら貿易は許されていたため、引き続き多くの宣教師が入国していた。

⁸1580年にアレッシンドロ・ヴァリニャーノ Alessandro Valigniano (1539-1606) によって有馬と安土に設立された、聖職者を目指す少年たちのための教育機関のこと。

⁹ヴァリニャーノによって発案されたローマへの使節のこと。伊東マンショ (ca.1569-1612)、千々石ミゲル (ca.1569-ca.1633)、中浦ジュリアン (ca.1568-1633)、原マルチノ (ca.1569-1629) の4人を正使とした。1582年2月に長崎を出発し、1584年にリスボンに到着。ポルトガル、スペイン、イタリアを旅して、ローマ教皇グレゴリウス13世 Gregorius XIII (在位 1572-1585) に謁見、新教皇シクストゥス5世 Sixtus V (在位 1585-1590) の戴冠式に出席した。1590年に長崎に帰港した。

参考文献

伊川健二 2019 「フロイス史料研究事始」『多元文化』第8巻：232-211

岡本真 2019 「フロイス『日本史』の史料的価値——天文～永禄年間の事例にみる」『多元文化』第8巻：202-193

小野貴史 2005 「ルイス・フロイスの記述における中世日本の音楽観」『信州大学教育学部紀要』第115巻：99-106

狩野博幸 2010 『秀吉の御所参内・聚楽第行幸図屏風』 東京：青幻社

河内将芳 2015 『絵画史料が語る祇園祭 戦国期祇園祭の様相』 京都：淡交社

五野井隆史 1990 『日本キリスト教史』 東京：吉川弘文館

—— 2020 『ルイス・フロイス』 東京：吉川弘文館

バンガード, ウィリアム 2018 『イエズス会の歴史』上・下 上智大学中世思想研究所 (監修) 岡安喜代, 村井則夫 (訳) 東京：中央公論新社

深堀彩香 2016 「音楽面からみるイエズス会の東洋宣教——16世紀半ばから17世紀初期におけるゴア、日本、マカオを対象として」 愛知県立芸術大学大学院音楽研究科博士論文

フロイス, ルイス 1991 『ヨーロッパ文化と日本文化』 岡田章雄 (訳) 東

京：岩波文庫

—— 2000 『完訳 フロイス日本史』全12巻 松田毅一, 川崎桃太 (訳)

東京：中央公論新社

松田毅一 1962 「パードレ・ルイス・フロイス著「日本史」の研究：新写本の出現に就いて」『天理大学学报』第14巻第1号：80-94

山上千乃 2022 「キリシタン時代の日本の音楽実践の様子——フロイス『日本史』の記述の考察を通して」愛知県立芸術大学音楽学部卒業論文

結城了悟 2005 『ロレンソ了斎：平戸の琵琶法師』長崎：長崎文献社

ルイズ・デ・メディナ, ホアン 2001 「キリシタン布教における琵琶法師の役割について (イエズス会日本関係史料研究会報告)」安達かおり (訳) 『東京大学史料編纂所研究紀要』第11号：172-183

ウェブサイト

「画像資料にきく祇園囃子」

<https://rcjtm.kcuu.ac.jp/archive-db/zuzougionbayashi/index.html> (2023年12月18日閲覧)

「東大寺 鐘楼」 <https://www.todaiji.or.jp/information/shoro/> (2023年12月18日閲覧)

「洛中洛外図屏風 (上杉本)」

https://www.nhk.or.jp/school/bunkazai/cont_04/cont_04.html (2023年12月18日閲覧)

資料 フロイス『日本史』に見られる音楽の記述

通し 番号	巻	ページ	部	章	西暦	内容
1	1	146- 147	1	36	1562	[...] 都(京都)の市内では、古来、神や仏に対する畏敬から盛大な祭りが行なわれた。[...] 第六月の十五日には、祇園と称せられる偶像を敬う祭りが催される[...]。[...] 行列では、まず上部にはなほ高い舞台が設けられた十五台、またはそれ以上の車が行く。[...] その車は二階、または三階で、その各階には高価な絹衣をまとった、都の市民の子供たちである大勢の少年がいる。彼らは楽器を携えており、そうした装いで演技をしたり大声で歌ったりする。
2	1	148- 150	1	36	1562	堺では七月二十九日に、住吉大明神という神を祀る別の祭りがある。[...] 準備が済むと、半里離れたかの住吉の社から、両手に刀を携えた偶像が騎乗して来る。その後から、弓と、矢を入れた籠を携える小姓が続き、その後方を手に鷹を持った別の者が続く。彼らの後から、徒歩や騎馬で偶像の伴をする大勢の人たちがやって来る。これらの人たちは皆、武器や武具を携え、「千歳楽、万歳楽」、すなわち千年の喜び、幾千万年の楽しみという意味の言葉を唱えながら歌い、かつ踊る。彼らがかくも喜悅してこれを唱えるのは驚くべきことである。多数の馬が進む[...]。[...] 馬が通過すると、神主と称する白衣の多数の僧が、はなはだ大きい広い袖の衣をまとい、紙か革でできた非常に美しい黒の僧帽を頭にかぶってやって来る。この後に女妖術師【巫子】たちが馬で進むが、彼女たちは同様に白衣をまとい、非常に美しく飾り、おびただしい数の婦人たちに付き添われ、歌いながら行く。
3	1	272- 273	1	60	1565	(ルイス・デ・アルメイダ修道士の報告。春日大社において) [...] 巫子と称される、ほとんどすべて四、五十歳以上の年齢の女僧たち [...]。[...] 彼女たちは、社人と呼ばれる一種の僧侶と結婚しています。両者ともこの神社に仕えています。[...] 何びとかが、健康、財産、安産、勝利、もしくは紛失物の再取得といったことを願うならば、この巫子のところに赴いて、自分のために神楽を催してもらいます。すると数名の社人が、太鼓その他の楽器を携えて現われ、巫子たちも同じように他の楽器を携えて現われ、そのうちの一人が縦長に切った紙片を結び付けた棒を手にして、神像の前で踊ります。彼女はそれを、鋭く速い音楽の伴奏によって、いとも激しく行ないますので、私たちの耳にはまるで地獄の叫喚と咆哮もかくやと思われるほどなのですが、ついに彼女は失神したように地上に倒れてしまいます。人々は、その時に神の霊が彼女に移るのだと言っています。ついで彼女は立ち上がり、人々が頼みに来たことについて答えます。これに対して彼らは彼女らに千二百カシャを支払います [...]。それから彼女たちは、この喜捨を自分たちの間、および一人が踊っている間に楽器を奏した僧侶たちの間で分配します。
4	1	279	1	61	1565	(ルイス・デ・アルメイダ修道士の報告。) この寺院(東大寺)【大仏殿】の境内の外に、非常に堅固な木造の塔があります。[...] 中にその主たる梵鐘があります。[...] それは口径がニプラサ、高さは三プラサ半、厚さは約一バルモ半ありました。それは柔和な音響で、遠いところからも聞くことができます。

通し 番号	巻	ページ	部	章	西暦	内容
5	7	85-86	1	113	1577	豊後の国には、田原親賢という一人の国衆【それは国のもっとも高貴な殿たちのことである】がいた。 […] 彼は後継ぎの息子がなかったので、都に赴き、そこで九歳か十歳くらいと思われる柳原殿という公家の息子である一少年を養子にした。 […] 彼はすでに立派な素質の持ち主であったので、親賢の努力のお陰で、親賢が彼に学ぶようにと命じたことすべてにおいて、短期間に顕著に上達し、一同が驚嘆するうち、同じ年配の他の貴人たちを凌駕してしまい、書道とか難しい書物を理解することにおいて、また彼ら日本人の種々の楽器の演奏において、さらに乗馬、剣術、弓術、銃術、礼法、儀式、政庁のもろもろの仕来り、その他あらゆることを大いに学習し精通するに至った […]。
6	2	137-138	1	85	1569	司祭（フロイス）が都に到着して三日を経、和田（惟政）殿は司祭が信長の許へ伺候する準備を整えた。 […] 信長は邸の奥に入っていて、音楽を聞いていた。
7	9	309	1	92	1570	[...] ドン・バルトロメオ（大村純忠）とその奥方は婚姻の秘蹟を受けた。ついで盛大な祝宴が催され、それに輪舞、舞踊、奏楽、その他彼らの間で慣行となっている祝い事が伴った。
8	5	29-32	2	116	1588	（五月十四日に秀吉が行なった、後陽成天皇の行幸での聚楽第から内裏へのお迎えにおいて）先頭には、濃紅色のダマスコ【織の衣服】を着た七十名の騎馬の人たちが進んだ。 […] 第二番目に整然と続いたのは、内裏（後陽成天皇）に仕え、内裏に次ぐ貴人である公家たちで […]。第三番目には、君侯や諸国の肩書きがある勇将たちが進んだ。 […] 第四番目には、内裏の親族か、または内裏家で高位を占める重立った僧侶たちのための、美しい色彩の漆塗りの十七台の輿が続いた。第五番目には、良材で作った十五台の白い輿が進んだが、内裏の婦人たちがそれで来るようになっていた。 […] 第六番目には、巨大な二頭の牛が進んだ […]。 […] 第七番目には、全部黒漆塗りの車輪が付いた凱旋車が続いた。 […] その輿の中には、あたかも偶像のように高慢きわまりない暴君【関白】が鎮座していた。さらに約百名の公家が従っていた。 […] 内裏を関白の城に迎えるために、一行がこうした盛儀と華麗さを装って目的地の内裏の宮殿に着いた後、上記と同じように人員が配列し、同じ形式で帰還したが、さらに次の人々が加わった。第二番目には、日本の君侯のように全員唐織をまとった三十名の騎乗した年配の公家が行進した。ついで立派なダマスコ織を装い、地面を引き摺る長い衣裳をまとった公家の一団が徒歩で進んだ。彼らは宮廷の楽団員で、あるものは笛を、他のものはヴィオラ【のような楽器】を、また他の者は内裏の宮殿で用いる種々の楽器を奏でていた。それらは日本人には響き良く快くとも、我らヨーロッパの音楽と比べると、耳障りで不快なものである。
9	5	33	2	116	1588	内裏（後陽成天皇）は暴君【関白】の御殿と城【聚楽亭】に五日間滞在した。その間盛大な祝典や数々の娯楽が催され、連日、素晴らしい饗宴と奏楽が行なわれた。

通し 番号	巻	ページ	部	章	西暦	内容
10	1	241	1	58	1565	[...]（京都の）幾人もの人々は、この「南無阿弥陀仏」の呼称を、街頭でも、家の中でも、売買の際にも、つねに種々の旋律でもって繰り返すほど、熱心に行なうのである。そして多くの男女 [...] は信心の業として、死んだり、力尽き果ててしまうまで、真夜中を少し過ぎた頃に家の中で起き出でて、小さな鉢—特にこの祈りのために作られたもの—を持ち、一本の棒で叩く。そして彼らはその音に和して、夜の残りを天明に至るまで、隣近所全体に聞こえるほど大声で阿弥陀の名を歌いながら呼び続けるのである。
11	7	150	2	4	1578	日本には、その年の七月に盆と呼ばれる祭りを行なう習わしがある。それに先立つ十日あまり前に、数名の俗人で身分の低い阿弥陀の信徒らは、人々の信心を高めるために、夜の十時から夜半過ぎの二時か三時まで、仏の名を唱えながら、鉢をゆっくり叩いて街路を歩く。響きのよい音楽のようなその声を聞くと、同宗の者は戸口に出、仏僧たちに届けてもらうよう彼らに喜捨を行なう。彼らはこの業を、一晩ないし二晩行なうが、嫡子（大友義統）は、夜間に阿弥陀のことを唱って歩く者があれば、見つけ次第殺してしまうやうにと布告させたので、それ以来二度と唱う者はいなくなった。
12	1	141	1	35	1562	都（京都）のキリシタンたちは、二、三里も離れたところまで司祭を出迎えに行った。[...] 降誕祭の夜を彼らはその習慣に従い、大いに荘厳に、そして聖歌を歌って祝賀した。だが我らの主なるデウスが、この国で讃美されるのを堪え難く思った異教徒たちは、夜通し教会に投石した。
13	8	72	2	61	1585	（府内近くの津守で十字架を建てる際に） [...] 府内の市で仏僧や異教徒たちをあとと言わせようと、松の木を伐り出した場所から真直ぐの道を通ればもっと近かったのに、一同は協議の上、府内では年に一度の祇園祭りという異教徒たちの盛大な行列の時だけに用いられる車の上に、その松材を乗せて運搬することにし、 [...] 何人かは、額に入った聖像を携え、横笛、その他、奏楽や祝祭に用いる楽器を持って材木の上に乗っていくことに決めた。
14	6	54-56	1	5	1551	山口には、片眼が全然見え、他の眼はごくわずかしか見えな一人の盲人がいた。彼は日本での一般の習慣どおり、琵琶で生計を立て、貴人たちの邸で奏でたり歌ったり、諧謔や機知を披露し、昔物語を朗吟したりしていた。というのは、彼は、この点、盲人たちが絶えず従事している按摩以外に、その澆刺とした才気や大いなる識見、また理解力と恵まれた記憶力によって、他の多くの盲人たちに擢んでており、好まれたのである。彼は、異国人たちがその市（山口）で新しい宗教を説いていることを耳にしたので、司祭を訪れる決心をし、事実訪問した。[...] メストレ・フランシスコ（・ザビエル）師は、十分教えこんだ後に彼に洗礼を授け、ロレンソの名を与えた。[...] 彼は、物語りをし、琵琶を弾き、朗吟したりして人々を楽しませる仕事で生計を立てていたのを断念し、自分の性質に応じてできそうな任務で我らの主なるデウスに奉仕するために、教会の一員になることを決意した。[...] 彼は今日までにイエズス会が日本で有したもっとも重要な説教師の一人となった。

通し 番号	巻	ページ	部	章	西暦	内容
15	4	157- 158	2	88	1587	五畿内の諸侯の間には、一人の若い盲人を家に置いて奉仕させる習慣があった。それには二つの目的があり、一つは自分たちの遊楽のためで、彼が歌ったり奏でたり、日本の古い歴史を吟ずるのを常とした。第二には外部に伝言を遣わすためであった。けだし彼らはふつう思慮深く、物事の交渉に巧みだからである。我らの教会においても、こうした盲人の若者を幾人か、彼らがキリシタンになった後に使っていた。だが目的は異なり、彼らをして、田舎を廻って新たな改宗者にキリシタンの教義を教えたり、異教徒に説いたり、キリシタンたちに聖人伝やデウスのことを話させるためであった。
16	4	158- 159	2	88	1587	彼（盲人トビアス）はこの巡礼行を都に隣接した近江の国から始め、目的地の重立った貴人たちの邸に着くと、ふつう盲人は憐れみと親切さをもって遇されていたので、宿を提供された。借り物で入り己れの物を携えていくために、彼はまず背にしていた琵琶を奏で、幾つかの古い歌を吟じ、得意とする含蓄ある二、三の冗談でもって相手の気持ちを把握し、憐憫の情を獲得したと見なすやいなや、おもむろにデウスの話を持ち出した。そこで彼らはその話題の新奇さと、愛情をこめた話しぶりに少なからず驚かされた。彼はその説話でもって人々を満足させると、もはや彼らの許に長くは留まろうとはしないでこう言うのであった。「事は人の靈魂と救いというきわめて大切なことです。もし貴殿らが心してこうした話を聞きたいと望まれるのであれば、都が大坂か堺に赴かれるのがよろしかろう。そこには教会があり、伴天連方や談義者たちがいて、貴殿らが知りたいと思うすべてのことを説明してくれるであります。【ご覧のとおり】某は無学で哀れな一人の盲人に過ぎませず、もとより貴殿方に必要な教えをお伝えできる器ではありません」と。トビアスはデウスのことを要点だけ語ったのだがそれでも彼らには強い印象を与え、少なからぬ関心と呼ぶに至った。
17	3	271	3	9	1590	[...] 高德で優秀なキリシタンであるトビアスと称する盲人の行為を割愛することはできない。彼は我らの聖なる教えに精通し、大いなる愛情と熱意をもって異教徒とキリシタンたちに説教していた。[...] 人々は [...] 日本で盲人に与える習慣となっているある肩書きを得させることを成就した。盲人たちは、この位によって高い尊敬を受けることとなり、あらゆる高位の人とも対話でき、琵琶を奏で昔の戦物語を歌って、かの諸侯を喜ばせていたのである。トビアスもこうした機会を得ることによって、この期間中、各地を巡歴し、キリシタンたちを慰め励まし、異教徒を改宗させたりして、人々の靈魂に多大の利益をもたらした。
18	1	174	1	38	1563	[...] 三ヶ殿は、日本の教会が五畿内地方で有するもっとも堅固な柱の一となった。彼の邸はあたかも修道院のようであった。十五カ年の間、その三ヶの教会で復活祭と降誕祭が祝われた。そしてその際、彼はその地で盛大に祝うために各地各国から参集したすべてのキリシタンに気前よく饗応したので、彼の支出と費用は相当なものになった。

通し 番号	巻	ページ	部	章	西暦	内容
19	1	286	1	61	1565	(ルイス・デ・アルメイダ修道士の報告。) […] 彼(高山ダリオ)は使者として美濃国に赴いた際に、二名の同国の有力な人物を改宗させました。 […] 日曜日にはすべての重立ったキリシタンとその夫人たちが教会に集い、連禱を歌い終った後、彼らに対して説教が行なわれました。
20	1	311- 312	1	66	1565	(都の)かの高貴な結城左衛門尉殿なる武人は天下における最良のキリシタンの一人で […]。 […] 彼は死んだ時、まだようやく三十二歳前後の若さであった。ところで司祭たちは自分たちも死や追放をつねに目前にしている状態にあっただにもかかわらず […] 彼のために盛大な葬儀と華やかな葬列の儀をいとも公然と執り行なわねばならなかった。 […] キリシタンは教義を響きのよい声で歌ったが、それは異教徒たちをしていっそう驚嘆せしめた。なぜなら異教徒らはキリシタンたちがその祈りを実に正確にラテン語で唱えるのを聞いたからで、彼らの耳には新奇なことであった。
21	2	235	1	91	1569	(長崎の)復活祭には、夜半に先立って、一同は聖なる主の御復活を讃美するために、礼服をまとい、大いに歌ったり踊ったりしながら教会にやって来た。行列とミサ聖祭が終わった後、キリシタンたちは、盛んに舞い踊ってその大祝日を慶賀し、主なるデウスが自分たち […] を救い出し給うたことを主に感謝し奉った。
22	3	102	2	30	1581	この高槻城で、巡察使は一同の合意のもと、聖週間の典礼を挙行することを決めた。それらの祭式はきわめて荘厳に行なわれ、近隣諸国のみならず、美濃や尾張からも短い期間にキリシタンが参集して我らを驚かせた。この祭典ははなはだ華麗かつ荘厳に行なわれたので、キリシタンたちの信仰と信心を大いに深めるところがあった。というのは、この祭典には、豪華な祭服や、聖歌、小祭壇、オルガン、銀の燭台、舟型香壺、振り香炉、飾り板が用いられ、参列者一同の満足と喜悅はひとしおであった。
23	3	317- 318	3	41	1593	(ジョアン・ロドゥリーゲスの書簡。) 総司令官のガスバル・ビント・ダ・ロシャが名護屋に太閤様を訪れました時、金色の槍を携えた【アフリカの】カフル人を護衛として連れて参りました。カフル人たちは赤い衣装をまとい、太鼓と笛を携えていました。太閤様はカフル人たちに太鼓と笛に合わせて踊らせました。カフル人たちは元来、この上もなく踊りが好きでしたから、それを見る人々は腹をかかえて笑い転げました。と申しますのは、彼らは順序も調もあつたものではなく、あつちに飛びこちに跳ね、始めたら最後、いくら、『もうよい、十分だ』と言いましても踊りをやめさせる方法とはなかったからでございます。
24	3	318	3	41	1593	(カピタン・モールが太閤様を訪れた時) […] 実はたまたまその時に、一人は学者で、他は軍事を司る高官の二名のシナの使節が居合わせる […]。七十名あまりのシナ人を従え、各使節とも白馬に乗って来ましたが、従者たちは彼らの流儀で笛と鏡鉞(にょうはつ)を奏していました。

通し 番号	巻	ページ	部	章	西暦	内容
25	5	63-64	3	13	1591 or92	巡察師が室（室津港）に滞在して […] 正月が訪れた。そしてその室の港を通過する諸侯の往来もきわめて活発となった。南蛮人の来訪というこのあまりにも珍しい出来事に魅せられた彼らは、四名の日本の貴公子【伊東マンショラ】やポルトガル人に逢ってこの上もなく喜んだ。彼らの大部分は巡察師のところへも来訪した。そしてこの折に、彼らは日本人公子らと大いにくつろいで語り合ったが、来訪した諸侯はいずれも皆使節の青年たちに対して深い尊敬を払い、彼らを手厚くもてなした。 […] その際、使節一行は携帯していた地図と海図、とりわけシナで描かれた大きい図柄のきわめて珍しいイタリアの図を諸侯に見せ […]。彼らはそれらを見、その他イタリアからもたらされた全円儀、地球儀、時計、および非常に珍しい書籍に接し、とりわけ使節の青年らが着ていた教皇からの贈物である衣服が豪華なことに仰天し讃嘆した。また使節の青年らが優雅に、かつ巧みな手つきで楽器を演奏する有様を見て、以上のことにも増して感心し、彼らからその演奏の仕方を会得しようと好奇心に駆り立てられ、演奏を続けるようしきりに懇願してやまなかった。
26	5	105-106	3	15	1591 or92	（秀吉と使節の聚楽第での面会において）関白はまた四名の公子に音楽を奏でて聞かせてもらいたいから、自分の前に出るようにと命令した。そしてそのために用意されていた楽器がただちに届けられた。四名の公子はクラヴォ、アルパ、ラウデ、ラヴェキーニヤの楽器を演奏し始め、それらに歌を合わせた。彼らはイタリアとポルトガルでそれを十分習っていたので、立派な態度で実に品よく軽やかに奏でた。関白はこれらの音楽を非常に注意深く、かつ珍しそうに聞き、彼らをしてもっと歌を歌わせた。というのは、公子らは、関白への敬意から、彼を煩わせてはいけないと思い、少しく楽器を奏でた後は弾奏を中止したからであった。彼は同じ楽器で三度、演奏し歌うことを命令した。その後、楽器を一つずつ自らの手にとって、それらについて四名の日本人公子に種々質問した。なおその他、彼はヴィオラ・デ・アルコとレアラージュ【携帯風琴】を演奏するように命令し、それらのすべてをきわめて珍しそうに観察し、彼らに種々話しかけ、汝らが日本人であることを大変嬉しく思うと述べた。
27	5	121	3	17	1591 or92	[...] 関白は、昼食後、巡察師から贈られた時計の調律を教わるために、【伊東】ドン・マンショとともに【ロドゥリーゲス】修道士を召喚した。 [...] さらに関白は新たに【伊東】ドン・マンショに向かって、汝は同僚たちといっしょに予の家臣になる気はないかと相談をもちかけた。その話の初めには、彼は音楽や楽器のこと、また彼らが訪れた諸国のことなどについて多くを語ったのであった。だがドン・マンショはあらかじめこういう勧告があるかと心得ていたので、さりげなく遁辞を述べたところ、関白はもっともなことだと答えた。

通し 番号	巻	ページ	部	章	西暦	内容
28	5	254	3	52	1592 or93	(朝鮮出兵の平安城でのシナ軍との戦いにおいて) [...] 翌朝、日の出の二時間後に、多数の無台の射石砲による威嚇射撃が始まった。ついで、種々の太鼓楽器のすさまじい音と、人々の喚声の中を、敵軍は見事に隊列を組んで来襲した。
29	6	85-86	1	8	1552	山口において日本で初めて降誕祭の祝いが催されたが、その報せに接したキリシタンたちは、これを大いに喜んだ。彼らは夜を徹するために我らの家に来て、夜明けの第二のミサまでそこに留まり、その間絶えずジョアン・フェルナンデスが彼らに朗読するデウスのことを傾聴した。そして修道士が疲れると、我らのローマ字を読むことができる一人のキリシタンの少年が読み、一同はデウスを讃美しながら夜を徹した。[...] 朝になると彼らはミサ聖祭に与かり[...]。
30	6	94	1	9	1552	コスメ・デ・トルレス師は仲間と援助者たちが(山口に)到着するのを待ちに待っていたので、彼らに会った時の喜びようは信じられぬばかりであった。[...] 降誕祭当日に彼らは歌ミサを唱え、キリシタンたちは、それが初めてのことであったから非常に喜んで傾聴した。そしてその夜を徹して彼らはキリシタンたちに我らの主なるキリストの生涯を読んで聞かせた。また司祭たちはそれぞれ三つのミサを捧げ、なぜそのように三度のミサを読むのか、その理由をキリシタンたちに説明した。
31	6	225	1	31	1562	アイレス・サンシェス修道士は(豊後の)病院の患者を世話し、日本人およびシナ人の少年ら十五名に読み書き、ならびに祭儀がより荘厳に行なわれるように歌とヴィオラ・デ・アルコの演奏を教えることを任務としていた。
32	7	17	1	47	1563	ドン・バルトロメウ(大村純忠)は、毎日ミサを聴きに来た。彼は夜中過ぎの三時には、すでに教会に来ており、祈りながらミサが始まるまで待っていた。事実、彼がミサに与かる時の敬虔で謙虚な態度は、大いに人々を教化するに足りた。というのは、日本では、民衆は殿たちとは分け距てられ、はるか遠い間柄であるのが習わしであるが、ドン・バルトロメウのために敷物が敷かれると、彼はその外に跪き、家臣に向かって教会の中では、自分の傍にいる貧しい人々を遠ざけたり、わずらわせたりしないようにと命じたので、彼と他の人々の間には何の身分上の差もないように見えた。そして彼は幾度か長い間、その場に留まって、子供たちがミサの後で歌うカテキズモを聞いた。また彼は、ミサの至聖なる秘蹟の玄義を聞くことを望んだので、ある夜には、午前三時から五時までジョアン・フェルナンデス修道士の許に留まった。

通し 番号	巻	ページ	部	章	西暦	内容
33	7	21	1	47	1563	[...] (アルメイダ) 修道士は口之津に向かってさらに旅を続けた。教理教育が終って修道士が子供たちに、幾つか聖書の歌を歌うようにと言うと、七、八名はアダム、およびあの罪のために世にはびこることになった禍の物語を歌い始めたが、彼らはそれを、それほどに幼い年齢の子供なら、より上手に歌うことができまいと思えるばかり感情をこめて歌った。同じようにして数名の少女は、別の主の御受難の歌を、同じく信心をこめて歌った。人々がこれらの子供たちにそれらのことを歌で教えたのは、彼らが自分たちの日本の異教的な歌を忘れるようにさせるためであったが、それは実に効果的で、かの地ではどこでも、教会で教えられた歌以外の歌は、もはやまったく聞かれなくなったほどであった。
34	7	26-27	1	53	1564	司祭は、当時まだ教会の力は十分ではなかったが、できうる限りキリシタンたちが信仰と信心のことでますます強められるようにと、彼らのため聖週の祭儀をとり入れるようにし、それを彼らに見せるよう働き続けた。彼がそこ(豊後府内)で初めて復活祭を祝った時には、真夜中を少し過ぎるともう各地からキリシタンたちが実におびたたく参集して、教会の中も教会の前の広場も人が満ちたほどであった。司祭は彼らのために行列を催したが、その際、白衣の十六人の少年が胸に十字架を掛け、頭には花環を戴せ、手には蠟燭を携えて進み、主なるデウスを讃美する聖歌を歌った。これらの少年たちはほとんど皆、両親から教会に奉仕するために司祭たちに差し出された人たちで、彼らはミサに仕え、司祭館で育てられた少年たちは、もうかなり巧みにヴィオラを弾くことができた。[...] 彼ら(キリシタンたち)はその日一日、慣例に従って教会で歌を歌ったり、くつろいで過した。
35	7	46-47	1	64	1565	(平戸で復活祭が祝われ) 第一のミサが捧げられ、ほとんど全員が信心の念から携えて来ていた蠟燭のほか、多くの美しい提燈に火がともされた後、土地のもっとも身分の高い貴人たち六名が運ぶ天蓋の下に聖体が捧持されて行列が進み、その際、幾つかの詩篇が歌われた。
36	7	184-185	2	7	1578	(大友義統の妻の洗礼において) [...] 嫡子(義統)は、翌朝、出陣せねばならなかったで、司祭はただちに四名の修道士を遣わして、新しい礼拝堂の飾りつけや整備に当らせた。彼らの後を追って司祭が夜の十時にそこに行くと、嫡子が一生懸命になって、修道士たちが礼拝堂を飾りつけるのを手伝っているのを見出した。[...] 天明には望み得る最大の盛儀と祭式をもってミサが始まった。最初には、長い祭衣をまとった三名の司祭と、十字架と燭台を携えた修道士たちが出て、礼拝堂を祝別した。その後で、オルガンの歌(多旋律聖歌)の調べの中を、三名で捧げる荘厳ミサが始められた。礼拝堂の正座には、嫡子が数名の重臣を従えて着席した。

通し 番号	巻	ページ	部	章	西暦	内容
37	7	301- 302	2	22	1580	<p>[...] 九月に、巡察師【アレシヤンドゥロ・ヴァリニャーノ】は、フランシスコ・カブラル師、ならびにその伴侶とともに下から豊後に到着した。</p> <p>[...] 時に嫡子は府内から三里距たったところにおいて [...]。巡察師は同所 [...] から臼杵に向かい、国主フランシスコ（大友宗麟）を訪問した。</p> <p>[...] 国主は、聖フランシスコの祝日を慶賀しようと、ただひたすらにその日を待ちに待っていたのであった。その祝日は盛大に慶祝され、巡察師は、城内において立派な飾りつけがなされた中で、オルガンの奏楽のうち、美しい祭服をまとってミサ聖祭を捧げた。</p>
38	8	11,16	2	38	1582	<p>[...] 豊後の国に [...] 国衆の一貴人がいた。道易（志賀親度）と称する異教徒で、デウスのことに親しもうとはせず [...]。同家の嫡男は太郎殿という十六歳【の若者】であった。[...] 彼の父はかねがね息子がキリシタン宗門と係わりを持つことを快く思っていなかったし [...] 家臣たちに対して、その息子を夜分嚴重に監視するように命じていた。だがその若者は策略に長けており [...] 同夜家を抜け出し [...] 夜の十時には臼杵の教会にたどり着いた。そして夜明け前の四時まで一睡もすることなしに教理の説教を聞いた。司祭や修道士たちは、彼が修道士の述べるデウスの話を聞く喜びを味わいたいばかりに、かくも勇み、一晚中堪え抜く様子に接して驚嘆した。司祭たちをさらに驚かせたのは、彼を歓迎しようとして、そこには、日本人がふつう眺めて楽しむ絵画とか壁布が用意されており、また折からの厳寒を少しでも快適に過ごせるようにと、時々クラヴォが奏されたが、彼は一度として、それらの絵を見るために振り向いたこともなければ、そのクラヴォの音を聞こうと顔を動かしたことがない [...]。</p>
39	9	17	1	42	1562 or63	<p>(平戸の) キリシタンたちはデウスの御子の至聖なる御降誕の夜をできるだけ立派に祝った。ジョアン・フェルナンデス修道士はその日の福音について説教をし、一同は同夜の残りの時間を、絶えず、ノエ、アブラハム、シビラなどの物語を歌って過した。</p>
40	9	20	1	42	1563	<p>[...] 【西暦の一五】六三年一月二十三日 [...] アルメイダ修道士は生月に戻り、その翌日、[...] 彼は生月に一基の十字架を建てた。[...] 約千人のキリシタンたちが行列に参加し [...]。数人のポルトガル人が踊りながら前を行き、殿には、善良な老人コスメ・デ・トルレス師とジョアン・フェルナンデス修道士が進み、彼らは聖母の像を携えて、連禱と「ラウダテ・ドミニン」【Laudate Dominum omnes gentesのこと】を歌っていた。</p>

通し 番号	巻	ページ	部	章	西暦	内容
41	9	21-22	1	42	1563	この時節の主な祝日、ことに割礼と御公現の祝日は、(生月の)キリシタンたちによって盛大に祝賀された。彼らはその際、幾つかの聖書からとった物語、たとえばアダム、牧者、天使、シビラ、最後の審判、東方からの三王の来朝、聖母【マリア】が彼らに語られた次第、賢者とヘロデとの間に生じたことなどを芝居にして上演した。それらはどれも非常によくできていて、立派にかつ敬虔に上演された。夜は教会は人で満ち、そこで婦人たちが片側に、男子は他の側に坐り、一同が、我らの主キリストの御来世、天国の栄光、至聖なイエズスの御名、十字架、キリシタンの掟、異教徒の蒙昧、悪魔の欺瞞などについての詩を、彼らの日本語で歌った。[...] この島の人たちは、ただこれ以外のことは何も歌わず、それらをすべて暗誦していた。そして歌っている時に、彼ら自身が大いに敬虔な気持ちを感じたのみならず、聴衆もまた同様なのであった。
42	9	66-67	1	45	1563	当時島原では、キリシタンの間だけでも二百人くらいの子供がいて、そのうち約七十人が教理を学びに来ていた。彼らは裕福な人たちの子供だった [...]。彼らはほとんど毎日のように異教徒たちとデウスの教えについて討論した[...]。 [...] この子供たちが歌っていた歌は、「ドチリナ・キリシタン」、主キリストの御受難、旧約聖書の中の物語であり、それら全てを節をつけて歌っていた。
43	9	74-75	1	46	1563	(島原の)子供たちは教会における教理の勉強に実に熱心で [...] ずっと教会から離れないでいた。彼らはそこで讃美歌や祈禱文を暗誦し、仏僧たちの前でも憚ることなく、また街頭の人々の前でも恐れることなくそれらを歌った。
44	9	87-90	1	48	1563	(横瀬浦でコスメ・デ・トルレスが元后聖母マリアの被昇天の日に誓願を立てることになり) [...] 三、四日前から修道士アイレス・サンシェスが五、六人の日本人とシナ人の少年を連れて豊後から来ていたが、修道士はこの少年たちに自らヴィオラ・デ・アルコを教えこんでいた。そして彼らはもうミサ仕えもでき、相当上手に演奏も行なった。[...] 聖母の祝日前夜の晩課を少年たちが歌い、ルイス・フロイス師が祈禱文を唱えた。ところがその真最中にフロイス師は激しい悪寒をともなったひどい高熱の発作に襲われて、ほとんど立っていられなくなった。[...] だが彼はデウスの御好意に信頼しつつ弱い自分を鼓舞してやまなかった。というのも朝方には、教会も広場も人が溢れていたからで、彼はひどい熱に冒されていたとはいえ、祭服を着に行き歌ミサを捧げた。
45	9	112	1	49	1563	(高瀬での)降誕祭には数人のキリシタンが、男も女も子供たちも海路、島原からそこにやって来た。司祭は [...] 全力を尽して彼らのために三度のミサを捧げた。[...] 彼らは夜通しデウスを讃美して歌を歌った。

通し 番号	巻	ページ	部	章	西暦	内容
46	9	125	1	50	1563	降誕祭に、ドナ・イザベルは、聖夜にミサに与らせるため子供たちを平戸から度島に送って来た。 […] 一同は軽い食事をとった後、整然と、男子が片側に女子が他の側というように教会内でそれぞれの席についた。物語り形式でその夜の玄義に合った聖書の中の幾つかの箇所を歌い始め、そして第一のミサの時に至った。ミサのそれぞれの間に個々の説教がなされた。
47	9	127	1	50	1563	(度島において) 復活祭には男も女も一番上等の着物をまとい、頭には薔薇やその他の花の環をいただいて集まり、行列に加わって行ってミサに与かろうと待ちうけた。 […] 実際のところ、ここでの祝祭に際しては、他の地方でならば慣習となっているようないろいろの仕方とか外面的な装いがひどく欠けていた。というのは、そこには装飾らしいものといえぱった一枚の粗末な布しかなく […]。ジョアン・フェルナンデス修道士は短白衣を着、薔薇の冠をいただいて前方を進んだ […]。 […] 彼は「マリアよ、汝、途にて何を見しや、我に告げよ」と歌いながら、大いに満足した。彼の傍では一人の老人が彼の言葉に答えたが、その人は、以前仏僧で、今はトメという教名のキリタンで […]。そして彼はこの地には他に楽器がないので、一本の木の棒で金盥(きんかん)を叩いた。
48	9	181-182	1	63	1565	(平戸において) ジョアン・フェルナンデス修道士は […] 毎日に子供たちに教理を教えたりした。子供たちはそれらを合唱して歌いながら暗誦した。「パーテル・ノステル」、「アヴェ・マリア」、「クレド」、「サルヴェ・レジーナ」を彼らはラテン語で、その他のすべてを母国語で唱えた。彼らはミサ答えもできたし、司祭といっしょに死者を埋葬に行く時には、彼らが祈る「ミゼレレ」、「ヴェニ・クレアトル・スピリトゥス」および連続も知っていた。
49	9	266	1	73	1566	司祭(ヴィレラ)がそこ(生島島)から根獅子の港に行くと、その村の全住民は […] 司祭や修道士(フェルナンデス)が来るのを大喜びして海岸で待ち受けており、彼らが上陸すると、一同は行列をつくり、手を合わせ、大声で教理を歌いながら教会に達し、驚嘆に値するほど無邪気な純真な心をもって創造主なるデウスを讃美し奉った。
50	10	105	1	116	1578	(アントニノ・ブレネスティエーノの書簡。シナから日本に来る船が大嵐に遭った時) […] 『キリスト教教理』が、陸上におけると同じ落着きぶりで歌われるのが聞こえたのは、かなり驚嘆すべきことでした。 […] 一方では、上甲板に投げ出されて索具にしっかり掴まっている人たちが素足無帽で合唱隊をつくり、他の側では、同じ状態にある司祭や修道士たちが別の合唱隊をつくっていました。
51	10	150-151	2	20	1580	(有馬でのミサ聖祭において) 三基の聖墓が作られ […]。 […] その墓に聖体は土曜日の朝まで安置されたが […] 聖土曜日のミサのグロリアが歌われた時に、突如としてそれまで掩われていたすべての黒幕が取り除かれた。下の方はすべて白色布で掩われていて、主の復活を象徴し、オルガンの演奏と鈴の音のうちに人々の心の喜びを更新させているかのようであった。

通し 番号	巻	ページ	部	章	西暦	内容
52	10	186-187	2	34	1581	(神学校の学生たちにおいて) 我らのローマ字は彼らには見馴れないものであるにもかかわらず、彼らはそれで読み書き歌うことを巧みに覚えていった。[...] さらにオルガンの歌(多旋律聖歌)やオルガンの演奏をも学んで一日を過した。彼らの多くの者はすでにオルガンを弾きこなし、荘厳ミサを歌うことができる。そしてすでに相当な聖歌隊を組織している。
53	10	209-210	2	36	1582	(有馬の) [...] 神学校において、我らの念願の初穂がすでに見事な成長ぶりを示し始めていた[...]。[...] ある者はオルガンの歌(多旋律聖歌)を覚え、とても立派な聖歌隊をつくって、彼らのミサを行なった。
54	10	253-254	2	45	1583	[...] 彼ら(有馬の少年少女)は毎日、教理の授業の終りには、定められた聖なる詩篇を歌うのを常とした。すなわち、日曜日には「主、述べ給う」【Dixit Dominus】を、月曜日には「祝せられ給いし者」【Benedictus】を、火曜日には「子らよ、讃えよ」【Laudate pueri】を、水曜日には「讚美せよ」【Magnificat】を、木曜日には「打ちひがれしイスラエルにて」【In exitu Israel】を、金曜日には「【我らを】憐れみ給え」【Miserere】を、土曜日には「アヴェ・マリス・ステラ」【Ave maris stella】の讃歌を歌い、そして日曜日にはミサ聖祭が始まる前に先立って民衆の前で、彼らの日本語で、問答風にキリシタン教理を述べた。こうすることによって、彼らは自らの学習に役立たせたばかりでなく、教理を知らない周囲の人々にもそれを教えたのであった。
55	11	14	2	60	1585	四旬節の最初の金曜日に、[...] 一司祭が、大村の浜に病人の告白を聴きに行った。[...] 夜の九時を過ぎていて[...]。司祭は、そこの漁師の子供たちである、おびたしい数の少年少女が、何年か前にその浜辺に建てた古い十字架のもとで跪き、鞭打ちの苦行をしているのに出会った。その間彼らは互いに、ミゼレレ・メイ・デウスの詩篇を敬虔に歌って[...]。
56	11	97-98	2	92	1587	(伊予での布教において) 司祭たちはその地に一基の大きい十字架を建てることに決めた。[...] 司祭たちは長さ【高さ】が十三ブラサもある杉の大木を購入し[...]。町内の重立った人たちが司祭のもとに使者を寄こして[...] 百人以上の人たちが材木を取りに行った。[...] 一行の前には、大勢の少年とか、すでに成長した若者たちが[...] 歌ったり踊ったりしながら進んだ。他の連中は太鼓を鳴らし別の者は笛を吹きながら行進した。
57	11	189-190	2	113	1588	(グレゴリオ・フルヴィオの書簡。大矢野島の) ある場所で私は、子供たちが全部の折りを非常によく知っており、「ラウダテ・ドミヌン」を長崎の子供たちに負けないほど上手に歌っているのを見ました。このように私たちは、街路の一方から幾人かが「パーテル・ノステル」を歌い、他方からは「アヴェ・マリア」を歌い、別の人々は「クレド」を歌いながら出て来るのを耳にしながら進みました。その田舎では、聞こえるものとしてはただデウス様を讃美する声ばかりでした。

通し 番号	巻	ページ	部	章	西暦	内容
58	11	254	2	119	1588	神学校では彼ら（神学校の学生）は三つのクラスに分かれている。勉学における彼らの進歩はまずまずというところである。というのは、彼らにとってラテン語の構造は、我らにとっての日本語にも劣らず奇異なはずだからである。彼らは毎日二時間、日本の漢字を学習し、他の時間を歌の練習に費やしている。そして彼ら自身の中から年少者のクラスのための教師を選び、年少者にあてがうことにしている。
59	11	254	2	119	1588	（移転先の八尾尾の神学校において）年間の幾つかの主要な祝祭日には、彼ら（神学校の学生）は貧素な藁葺きの礼拝堂で、オルガンの歌（多旋律聖歌）に合わせて敬虔に自分たちのミサを司った。
60	11	333	3	1	1590	（長崎において）一行（天正遣欧使節）がかの地（ヨーロッパ）からもたらした多数のさまざまな楽器を奏したり歌ったりするのを聞くと、誰もがひとかたならず喜んで、そうした多数の楽器の協和音と、その間に保たれる相応性には驚嘆した。
61	12	63	3	20	1591 or92	（有馬でローマ教皇が使節にくれたものを有馬晴信に渡す式典において） [...] 四人の貴公子は聖下から賜った長衣をきらびやかにまとっていた。巡察師による荘厳ミサが始められ、神学校の同宿たちがオルガン、その他の楽器をもって祭事を勤めた。説教が行なわれたが、そこでは四人の貴公子の使節の意図、 [...] 今、贈呈される聖木十字架は [...] いかにか珍重されるべきものかについても詳しく語られた。
62	12	95	3	23	1591 or92	[...] 巡察師は彼ら（天正遣欧使節）を天草に連れて行き、一五九一年七月二十五日、栄光の使徒サンティアゴの祝日に [...] イエズス会に受け入れられた。巡察師は、種々の楽器を伴ったオルガンの歌（多旋律聖歌）で荘厳ミサを捧げ、キリタンたちに対する説教がなされた。[...] その [...] 後、巡察師は四人の貴公子を修練院に連れて行き、その院長に引き渡した。
63	12	160	3	33	1591 or92	彼ら（神学校の少年）は [...] きわめて短時間に、いとも容易にあらゆる種類のヨーロッパの楽器を奏することを覚えた。彼らは、ヨーロッパに赴いた四人の貴公子で今は彼らのイエズス会の修道士となっている人たちに教わっているので、その多くの者がまもなく覚え、それらの貴公子たちがヨーロッパで教わったように見事な手さばきと容易さをもって、互いの間で実に巧みに曲を奏でていた。
64	12	160- 161	3	33	1591	過ぐる【一五】九一年の降誕祭にあたっては、神学校は [...] ラテン語の練習にもなろうと考えて、エステヴァン・トゥシオ師によってラテン語で編曲され、ローマの神学校で上演された降誕祭劇を、日本語による幕間の幾つかの余興を添えて演ずるように命じた。彼らは大いなる気品と威厳をもってそれを演じ [...] 司祭たちも [...] 衣裳とか人物の演技という点ではかの地のそれに比べ何ら遜色がないと判断するほどであった。というのは、この劇には、日本の貴公子たちがヨーロッパから持って来た長い衣裳も短い衣裳もほとんどすべて現われたし、出演者はそれらをまとめて実に豪華に着飾り、教えられたとおり、我らヨーロッパの仕方に合わせ声や身振りで演じたからである。

通し 番号	巻	ページ	部	章	西暦	内容
65	12	230	3	37	1593	他の施設では、この迫害期にあつては、祭儀をそれにふさわしい盛大さをもつて公に催し得なかつたが、（八良尾の）神学校は山の中に隔離されているために、また音楽を練習したり、種々の楽器を奏するのに大勢の人々が集合できる便利さがあつて、いつもできうる限り盛大に祭儀を行なつていた。日曜日ごとに通常、歌ミサが捧げられた。ある時はグレゴリアンの歌で、またある時はオルガンの歌（多旋律聖歌）で、種々の楽器の演奏を伴つて催された。ある時はオルガンで、ある時はヴィオラ・デ・アルコで、またある時はアルバ・ラウデで、またヴィオラやクラヴオの楽器でなされた。少年たちの多くの者が、これらの楽器を巧みに奏した。そのほか、ある時は晩禱を、ある時は午後に終禱を歌つた。